

# 近代日中における接尾辞「的」の受容

稲垣智恵

## The Acceptance of the Suffix “的” in Japan and China in Modern Period

INAGAKI Tomoe

Many Japanese suffixes, such as 的 “-teki” were created in the early Meiji period in order to translate Western languages with inflection, and they were also introduced to China. To date, those suffixes have been used in both Chinese and Japanese as they can be found in modern Chinese and Japanese lexicons. While the Japanese suffix, 的 “-teki” is used to add an adjective meaning to a noun, whereas the Chinese 的 “de” is not. By comparing the usage of the suffix 的, this paper examines how differently Western languages with inflection were understood by Chinese and Japanese people, as well as, how the usage and meaning of the suffix have changed over time.

キーワード：近代語彙，白話運動，翻訳，形態変化，接尾辞

### はじめに

「悲劇的な一生」「科学的方法」「平和的に解決する」などのような、「名詞，特に抽象的な意味を表す漢語の名詞や体言的な語および句について，体言，または形容動詞語幹をつくる」<sup>1)</sup> 漢字接尾辞「的」の用法は，形態変化を持つ西欧語の形容詞を翻訳するため，日本において明治初期から使用されたとされている。近代日本ではこの他にも「現代化」の「化」や，「社会性」の「性」などのように，様々な漢字接尾辞が生み出され，多くの近代訳語と共に中国へ渡って行った。一般に中国が多く日本の近代語彙を取り入れた時期は日清戦争以降五四運動以前，1895から1919年の間とされており<sup>2)</sup>，接尾辞もこれらの新語と共に中国語に受容され，1919年から起こる白話運動の中でその用法を確立させていったと考えられる。しかし，「化」「性」などのような漢字接尾辞が現代中国語でも語に付いてその品詞を変化させる機能を持つのに比べ，接尾辞「的」は，現代中国語にも助詞“的”として存在するが，日本語の「的」のように品詞変更を行う機能は一般的にない。例えば，日本語で「女性的考え方」といえば，「女性のような，女性らしい考え方」という意味であり，ここで「的」は「女性」に形容性を持たせ，或いは「女性」

1) 『日本国語大辞典：第2版』9巻（小学館，2001年）604頁。

2) 沈国威『近代中日語彙交流史——新漢語の生成と受容：改訂新版』（笠間書院，2008（平成20）年）

という概念を抽象化している。しかし、中国語で“女性的想法”と言った場合、これは「女性の考え方」なのであって、“的”は“女性”に付着し“想法”を修飾する役目しかない。この二者の用法の差は大きく、日本語の「女性的」の主体は真に女性でなくともよいのに対し、中国語の“女性的”の主体は必ず女性でなければならないのである。

このように「的」と“的”は現代日中語で大きな用法のずれを持つ。もし、形容詞化接尾辞としての「的」が近代日本で生み出されたものだとすれば、近代中国に日本語の接尾辞「的」が渡ることはなかったのであろうか。或いは、一旦は中国に渡ったが生き残らなかったのであろうか。それとも、近代以前の中国語の“的”には形容詞化接尾辞としての効能があったのだろうか。

結論からいえば、接尾辞としての「的」は日本で生み出され、中国に渡り、近代中国において一度は「形容詞化の接尾辞」としての用法を得ながらも、その用法が現代まで完全に生き残ることはなかったのである。

本稿では日本語の接尾辞「的」が、近代中国において如何に理解され、受容され、そして廃れていったのか、その変遷に考察を加え、ある言語が異なる構造を持つ言語と接触した際に起こる言語変化に対する研究の一部としたい。

なお、本稿では日本語の「的」は「」で括り、中国語は“”で括ることとする。

## 一 日本における接尾辞「的」の成立

### 1.1. 接尾辞「的」の誕生

「平和的解決法」「社会的な問題」「文学的に見る」などのような接尾辞「的」は、現代日本語で前置される語に形容性を持たせ、「～に関する」「～のような性質を持ったもの」などの意味を表すことができる。これは一見中国語の助詞“的”と似通っているようであるが、現代中国語の“的”は名詞を修飾する語を作る機能はあっても、日本語のように前置される語句に形容性を持たせたり、曖昧化したりする機能は一般にないとされる。

明治以前の日本における「的」は、「泥的（盗賊）」「幸的（幸次郎・人名）」「猿てき（猿坂・人名）」「源てき（源七・人名）」中国の白話小説を真似た俗語としての用法が殆どであった（前田（1960）<sup>3)</sup>。これが明治以降、西欧諸語を翻訳する際、例えば“science（科学）”“democracy（民主）”“economy（経済）”などという名詞を、“scientific（科学的な）”“democratic（民主的な）”“economic（経済的な）”などという形容詞へと容易に変更することが可能な接尾辞が日本語に必要となったことから生み出され、広まったのである。例えば1872, 3（明治5, 6）年頃の西周『政略論 一』には以下のような例が見える。

- (1) 今政事學ト政略トノ關係ハ此兵家ノ戦法ト戰略トノ關係トモ異ナリテ、全ク觀察的ト實行的トノ區別ナリトシ、……（明治五六年頃稿）

3) 前田勇「「てきや」という語——俗語学者に物申す——」（『言語生活』第100号、筑摩書房、1960（昭和35）年）79-83頁。

（西周「政略論 其一」『西周哲學著作集』<sup>4)</sup>）（下線部筆者）

ここでの用法は、「的」が2字漢語に付着し「～すること」を表している。また、1881（明治14）年に井上哲次郎らが編纂した『哲學字彙』<sup>5)</sup>では、多くの哲学語彙が「的」を付けて翻訳されている。『哲學字彙』で語尾に「的」がとられている例は以下の通り。

「説正的、正面的 (Affirmative)」 「擴充的 (Ampliative)」 「自用的 (論) (Categorematic)」 「合式的 (Categorical)」 「合接的 (論) (Conjunctive)」 「辨證的 (Dianoitic)」 「辨證的 (Discursive)」 「離接的 (論) (Disjunctive)」 「解説的 (Explicative)」 「不可轉換的 (論) (Inconvertible)」 「不用明證的 (論) (Indemonstrable)」 「不可鑑別的 (論) (Indiscernibles)」 「可知的 (Knowable)」 「世間的 (Mundane)」 「説不的、反面的 (Negative)」 「直覺的 (Noetic)」 「客觀的 (Objective)」 「受動的 (Passive)」 「表現的 (Presentative)」 「原本的 (Primitive)」 「原本的 (Pristine)」 「合理的、辨理的 (Rational)」 「可覺的 (Sensible)」 「普有可覺的 (Common sensibles)」 「固有可覺的 (Proper sensibles)」 「主觀的 (Subjective)」 「自生的 (Sui generis)」 「副用的 (論) (Syncategorematic)」 「超絶的 (Transcendental)」

これらの「的」が付く語の原語はどれも形容詞であり、形容詞化接尾辞“-ive”“-tic”“-al”“-able”“-ine”などに相当する部分が「的」として訳されていると解釈することができる<sup>6)</sup>。

## 1.2. 接尾辞「的」の由来

近代日本において、名詞から形容詞へ品詞変更を行う接尾辞に何故「的」が用いられたかについては、2通りの理由が考えられる。

まず第1に、中国語の白話を真似たものである可能性。前述したように、江戸時代、日本において中国白話小説が大いに流行し、中国白話の助詞を真似た「土左的」「ニヤンの」(山田(1961)<sup>7)</sup>、「泥的(盜賊)」「幸的(幸次郎・人名)」「猿てき(猿坂・人名)」「源てき(源七・人名)」(前田(1960))<sup>8)</sup>などの用法が日本においても行われていた。このような例から見ると、白話小説に触れていた明治初期までの日本人が、中国語の助詞“的”自体に「付着する名詞の特徴や性質を持つ何か(特に人物)」を表す性質があると理解するようになっていたのは十分に考えられることであり、このことが土台になって、近代的な形容詞化の接尾辞「的」が現れた可能性は高いであろう。

4) 西周「政略論 其一」(『西周哲學著作集』麻生義輝編, 岩波書店, 1933(昭和8)年)286頁。

5) 井上哲次郎ほか『哲學字彙』(東京大学三部, 1881(明治14)年)。

6) しかしながら、『哲學字彙』でのこれら訳語は、1つの単語としては安定性が悪く、これだけで「的」が日本語に形容詞化の接尾辞として定着したとは言い難い。これはどちらかという成分的には中国語の助詞“的”に近い用法と考えられる。

7) 山田巖「発生期における的ということば」(『言語生活』第120号, 筑摩書房, 1961(昭和36)年)56-61頁。

8) 前田勇「「てきや」という語——俗語学者に物申す——」(『言語生活』第100号, 1960(昭和35)年)79-83頁。

第2に、音訳の可能性が挙げられる。大槻(1901)<sup>9)</sup>では接尾辞「的」を英語の“-tic”の音訳として以下のように述べている。

(2) 其時、一人が、不図、かやうな事を言ひ出した。Systemを組織と訳するはよいが、Systematicが訳し悪くい。ticといふ後加へは、小説の的の字と、声が似て居る。何んと、組織的と訳したらば、どうであらう。皆々、それは妙である、やってみやう。やがて、組織的の文で、清書させて、藩邸へ持たせて、金を取りにやる。君、実行したのか。うゝ、それは、ひどいではないか。何に、気がつきはせぬよ、などといふ戯れであつたが、扱此の的の字で、度々、むづかしい処が切り抜けられるので、遂に、嘘から真事といふやうな工合で、後には、何んとも思はず、遣ふやうになつて、人も承知するやうになつたが、其根を洗へばticと的が、声が似て居るからといふ事で、洒落に用ゐた丈の事で、実に捧腹すべき事である。是れが、的の字のそも／＼の原因である。

(下線部筆者)

ここで大槻(1901)が言う「小説」とは、白話小説のことであろう。英語の“-tic”に音が似ていることから「的」をあてたということが真実だとしても、それをわざわざ「小説の的の字に音が似ているから」としたということは、当時の白話小説の流行、そしてその中に現れる中国語の助詞“的”が日本人の間で周知されていたことを物語るものであり、その意味ではこの「音訳」説も中国語の影響により行われたとしてもよいだろう。

ともかく、接尾辞「的」が白話由来であろうと、音訳由来であろうと、この「的」字を用いて語に形容性を持たせる方法は、日本語に元々形容詞および名詞を形容詞化させる手段が乏しかった<sup>10)</sup>こともあり、日本において多用され、用法も安定していく。

1925(大正14)年発行の『明治奇聞』には1889(明治22)年11月の雑誌記事を引用し、次のように述べている<sup>11)</sup>。

#### 的の流行

支那の俗調文に倣つて熟語に的を加へ、文學的野蠻的婦女的など書くに至つたのは、明治十年後の哲學者が西洋譯語に積極的傍系的抽象的など使つたのに基くのであるが、これが一般に流行したのは明治二十二年頃であつた

これにつき同年十一月美濃の大垣で発行した『花の友』といふ雑誌に左の一記事がある

9) 大槻文彦「文字の誤用」(東京市教育会演説, 明治34(1901)年7月)本文は(『復軒雜纂1:国語学・国語国字問題篇』鈴木広光校注, 平凡社 2002年)251頁より。

10) 柳田国男「形容詞の欠乏」(『国語史 新語篇』刀江書院, 1936(昭和11)年)(『柳田国男全集:国語史 新語篇』第9巻, 筑摩書房)194-197頁より。

11) 宮武外骨『明治奇聞』(半狂堂, 1925(大正14)年)22頁。

○的字の流行 一日某活版所を訪ふ、雑談の末、主人曰く頃ろ文章界に於いて的字流行甚く、一語の裡、一行の間、二三の的字あらざるなく、其活字も他の活字の一倍を備るも猶ほ足らざるを愁ふ、（中略）

此時には流行的でムヤミに「的」の字を用ゐたが、其後は語譯の際、何々式、何々調、何々上など書くよりは「的」の方が便宜であり、イヤ味がなく、又學者らしいとされて、流行的でなく恒久的に使用される事に成つた（以下略）

（下線部筆者）

この記事からは、明治20年代に「的」が流行し、濫用されたが、その後「語譯の際、何々式、何々調、何々上など書くよりは」と、「～という性質をもった、～のような」という用法で定着していくに至ったこと、そして大正期に入ると現代とほぼ変わらず大衆的に使用されていることが見て取れる。以下、当時の使用例を二三挙げる。

(3) ……唯被動的、器械的の人物となりて自ら悟らざりしが今、二十五となりて既に久しくこの自由の大學の風にあたりたればにや心の中、何となく穩やかならず、……

（森鷗外『舞姫』1890（明治23）年・連体修飾<sup>12)</sup>）

(4) 校長は一つ咳拂ひして、さて器械的な改つた調子で、敬之進が退職の件を報告した。

（島崎藤村『破戒』1905（明治38）年・連体修飾<sup>13)</sup>）

(5) 「かう何も彼も一時になつて來ては、迎も手のつけやうがありませんな。何なら大學へでも入れて御覽になりますか。」醫者は絶望的に言斷つた。

（徳田秋声『足迹』1910（明治43）年・連用修飾<sup>14)</sup>）

(6) 其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として來て、また超然と歸つて行つた。

（夏目漱石『ころも』1914（大正3）年・述語<sup>15)</sup>）

（下線部筆者）

当時日本語において形容詞化の接尾辞としてこのように「的」が多用されたということは、書物や人間を介し、中国へと渡った可能性が非常に高いということである。中国に渡ったこれらの「的」はどのように理解されたのか。或いは近代以前に西欧諸語との接触によって、中国語が何らかの形容詞化の接尾辞を手に入れることはなかったのか。次章では、中国語が外国語と接触した際、形容詞を如何に書き

12) 森鷗外「舞姫」（『森鷗外集 獨逸三部作』和泉書院、1985（昭和60）年）6頁。なお、本書は初出本文影印である。影印元本の記載は以下の通り。『国民之友』第69号付録、1890（明治23）年、48頁。

13) 島崎藤村『破戒』（新潮社、1942（昭和14）年）30頁。

14) 徳田秋声『足迹』（岩波書店、1940（昭和15）年）116頁。

15) 夏目漱石『心』（岩波書店、1914（大正3）年）8頁。

表そうとしたか見る。

## 二 20世紀初期までの中国における“的”

### 2.1. 近代以前における“的”

そもそも中国が積極的に外国語と接触する以前、つまり19世紀末に至るまでの中国語の“的”はどのような語であったのだろうか。先行研究によれば、“的”字が助詞としての用法で用いられるようになったのは、発音の変化に伴ってのことで、宋、或いは元代以降のことであるとしている<sup>16)17)</sup>。劉敏芝(2008)では、“的”字に関して、宋代には姿を現し始めるとしているが、『朱氏語類』に至るまでは“底”との表記が多く、金代の文献『古本董解元西廂記』の中で初めて“底”より多く用いられ、元代以降、“的”との表記が大多数を占めるようになったのだという<sup>18)</sup>。

以下、近代以前の用例と“的”の役割を記す。

- (7) 婆子道：『敗花枯柳，如今那箇要我了？不瞞大娘說，我也有箇自取其樂，救急的法兒。』([明]『古今小説』<sup>19)</sup>) (名詞との修飾関係を表す)
- (8) 高俅道：“你那厮便是都军教头王升的儿子？”([明]『水滸伝』<sup>20)</sup>) (名詞との修飾関係を表す)
- (9) 子牙問曰：『你是那裏來的？』([明]『封神演義』<sup>21)</sup>) (“是……的”で述語を作る)
- (10) 猴王揺手道：“不好说！不好说！活活的虚杀人！……”([明]『西遊記』<sup>22)</sup>) (動詞や形容詞との修飾関係を表す(現在では“地”を用いる))
- (11) 合族中虽有许多妯娌，也有言语钝拙的，也有举止轻浮的，……([清]『紅樓夢』<sup>23)</sup>) (被修飾名詞を省略し名詞句の代わりとなる)
- (下線部筆者)

これらの用法は現在に通じるものではあるが、しかし、近代以前の“的”は小説や語録、つまり「俗文」を記したものの以外では使用されておらず、また、名詞から形容詞へと品詞を変更するような機能はない。

16) 太田辰夫『中国語歴史文法』(江南書院, 1958年)なお、今回は朋友書店版(1981(昭和56)年刊)のものを使用した。該当箇所は351-358頁。

17) 劉敏芝『漢語結構助詞『的』的歴史演變研究』(語文出版社, 2008年)。

18) 同上, 66頁, 102頁。

19) [明] 馮夢龍『古今小説』第1巻。なお、本文は人民出版社版(許政揚校注, 1958年, 19頁)による。

20) [明] 施耐庵・羅貫中『水滸伝』第2回。なお、本文は江蘇古籍出版社版(李靈年・陳敏杰校点, 1989年, 18頁)による。底本は容与堂百回本。

21) [明] 許仲琳『封神演義』第36回。なお、本文は人民文学出版社版(1973年, 331頁)による。底本は清代四雪草堂本。

22) [明] 吳承恩『西遊記』第4回。なお、本文は人民文学出版社版(1980年, 45頁)による。底本は明代世徳堂本。

23) [清] 曹雪芹・高鶚『紅樓夢』第14回。なお、本文は人民文学出版社版(1964年, 162頁)による。底本は乾隆程乙本。

## 2.2. 外国語との関係における“的”

19世紀から20世紀初頭にかけて出版された英華辞典は、中国が外国語と接触した際、どのように概念を変換したのかをみる良いツールである。中国が積極的に日本から語彙を輸入したのは、1895年の日清戦争に敗北して以降のことと考えられるが、それ以前、西欧諸語と接触した際、“-tic”などの形容詞化接尾辞はいかに訳されていたのだろうか。

- (12) Scholastic, Scholastical, a. Scholarlike, 儒教的, 内學的, 實學的; Scholastic learning, 實學, 内學, 内才; Scholastic education, 儒教, 教爲真儒; Pedantic, 書獃子, 書癡的
- (13) Democratic, Democratical, a. 民政的, 民政嘅
- (14) Close-bodied, a. 緊身的  
(『AN ENGLISH AND CHINESE VOCABULARY, IN THE COURT DIALECT』1844年<sup>24)</sup>)
- (15) SHINING 光亮的  
(『ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY』1866-1869年<sup>25)</sup>)
- (16) Scientific, 有學問的.  
(『字典集成 (AN ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY)』1875 (光緒元) 年<sup>26)</sup>)
- (17) Scientific, 有學問的.  
(『增新華英貿易字典』1901 (光緒27) 年<sup>27)</sup>)

これによると、日本で近代西欧語の翻訳に「的」を用いるより早い時期に、中国語で西欧諸語を翻訳する際、“的”を用いて形容詞の接尾辞を表しているようにも見える。しかし上記中国の例には、(12) “Scholastic learning, 實學, 内學, 内才”のように、英語では形容詞である箇所が接尾辞で訳されていない語もあること、そして同じく(12)の“Pedantic, 書獃子, 書癡的”などの例を見ると、ここで“的”を「形容詞化の接尾辞」というよりは、名詞を修飾する助詞であり、後置名詞を省略した形であると考えられる。特に(16)(17)のような例は分かりやすい。これらの例を見る限り、『哲学字彙』での翻訳と似ているとは言えるが、翻訳が原因で“的”に接尾辞機能が付与されたとは言い難い。その上、日本でのこのような「的」例と異なり、当時の辞書以外の中国の書物に、実際このように“的”を用いて形容詞的用法を記している例は見えない。

では、日本から間接的に実際運用を伴った形容詞化接尾辞「的」が入ってきた当初、中国ではどのように訳出していたのだろうか。次項では清末において日本語の「的」がどのように中国語に映されていたのか見る。

24) S. W. Williams 『AN ENGLISH AND CHINESE VOCABULARY, IN THE COURT DIALECT』(香山書院, 1844年)

25) Wilhelm Lobscheid 『ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY』(Daily Press Office, 1866-1869年)

26) 鄭其照『字典集成 (AN ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY)』(THE CHINESE PRINTING AND PUBLISHING COMPANY, 1875 (光緒元) 年)

27) 卓岐山『增新華英貿易字典 (MERCANTILE DICTIONARY)』(1901 (光緒27) 年)

### 2.3. 日本の「的」の進出

『時務報』<sup>28)</sup>は、19世紀末、1896年8月9日（光緒22年7月1日）から1898年8月8日（光緒24年6月21日）の2年間<sup>29)</sup>に黄遵憲、呉徳瀟、鄒凌瀚、汪康年、梁啓超らが関わり上海で発刊された旬刊誌であり、当時の知識人に多大なる影響を与えた<sup>30)</sup>。第3冊目以降は「東文報訳」として日本人漢学者古城貞吉が中国語に翻訳した『東京日日新聞』『讀賣新聞』『大阪朝日新聞』など日本の新聞記事を記載している。

今回、当時如何に「的」が中国語に訳出されていたか考察するため、筆者は『東京日日新聞』明治29（1896）年7月1日～明治30（1897）年8月11日の記事、『讀賣新聞』明治29（1896）年7月1日～明治31（1898）年8月8日の記事から、『時務報』『東文報訳』の中で取り上げられていた記事を探し出した。この期間中の記事で『時務報』『東文報訳』で取り上げられたものは全99（『東京日日新聞』75、『讀賣新聞』24）タイトル。うち接尾辞「的」が使用されている記事は、全18（『東京日日新聞』15、『讀賣新聞』3）タイトル、「的」の使用数は35回見られた。これを、「東文報訳」の該当部分と比較すると、以下のようになる。

(18) (表1)

表から分かるように、『時務報』『東文報訳』は細かに訳をしていたわけではないようで、要約といった方がいい記事もある。日本語の箇所該当する訳が見当たらなかった記事も多く、1つの訳出法にまとめることは難しいのだが、「的」をそのまま用いた例は一切みつからず、どれも適当な中国語に意識している。(18)–⑨「革命的現状」を「妖氛」と訳すなど、現代からすると意識の程度が甚だしいものもある。或いはかなり少ないが、(18)–⑧「地方的利益」を「地方之利」のように“之”を以て「的」に代えている訳もあるが、これは中国訳文では「シベリア地方の利益」という意味に解しているのであり、“之”によって形容性を持たせているとは考えにくい。また、『時務報』では、「主義」「世界」「国際」「革命」など、原文で近代概念を持つ語を使用している箇所は殆んど別の語に置き替えており、当時の中国ではこれらはまだ一般的な語ではなかったと推測される。

『時務報』『東文報訳』の中国語には接尾辞「的」の訳出を確認できないばかりか、一般的な助詞としての“的”も使用が見られなかった。これは接尾辞「的」の使用不使用以前に当時中国では未だ言文一致が成し遂げられておらず、口語由来の助詞“的”字が新聞のような翻訳文章に表れる可能性が極めて少ないからだといえる。

だが、これよりやや時代を下った1905年に記された王国維の「論近年之學術界」「論新學語之輸入」<sup>31) 32)</sup>に以下のような表現がみられる。

28) 全69冊。毎冊約20頁からなる。

29) 中華書局発行の影印本前書きによる。

30) 『時務報』影印版前書き及び王檜林・朱漢国篇『中国報刊詞典（1815–1949）』（書海出版社1992年）9頁。

31) 例(19)及び(20)。王国維「論近年之學術界」（『靜安文集』1905（光緒31）年）（『王国維先生全集初編』（五）台湾大通書局，1976年）1822–1829頁。

32) 例(21)(22)及び(23)。王国維「論新學語之輸入」（『靜安文集』1905（光緒31）年）（『王国維先生全集初編』（五）台湾大通書局，1976年）1829–1836頁。



近代日中における接尾辞「的」の受容（稲垣）

表 1

新聞名	年	日	タイトル	「的」用例	該当翻訳箇所
1 東京日日新聞	1896(明治29)年	8月7日	臺灣の經綸 (四)	……但々 <b>盲蛇</b> 的稅法を新設して更に人民の不信を來さざらんことを望まざるを得ず。……	……但宜斟酌盡善。不可造次以招人民之疑惑耳。……
2 東京日日新聞	1896(明治29)年	8月23日	銀塊低落の原因	……財産少なき中等以下の人物多く或は <b>破壞</b> 的主義の暴論客も少なきに非ざれば……	……類皆中下等之人。名望不甚隆。智識不甚饒。實産亦不甚厚。時不免有粗陋之徒。辭氣鄙倍。……
3 東京日日新聞	1896(明治29)年	9月27日	歐洲近時の外交方針	……此源因たる重に歐洲に存在する同盟は其効力を列國の <b>世界的</b> 關繫に及ばざるが故なり……	……蓋歐人所最重者。在審國家之利害。凡與國聯盟。外交政事。靡不量其同異。……
4 東京日日新聞	1896(明治29)年	10月22日	東歐巡遊記 八月卅十一日於■典府 碌堂生 東歐列國の形成 (一) 土耳其	……亞洲の極西に侵入して適々回數を觸接し其日 <b>連宗</b> 的排他一徹の教旨に感化せられて……	……侵入亞洲極西。適遇回教。被其感化。……
5				……該鐵道を國際上の企業及び <b>地方的</b> の企業として十分に之を發達するの策を講ずること目下の急務たり……	……該鐵路能密接東西之離隔矣。……
6				……又西比利亞鐵道を太平洋に頻する露領の <b>地方的</b> 交通上より觀察すれば……	……接隣之國。惟中國與日本。行旅往來。貨物聚散。……
7 東京日日新聞	1896(明治29)年	11月11日	露國太平洋汽船會社設立の計畫	……此の計畫成らざれば西比利亞鐵道の <b>國際的</b> 價格も <b>地方的</b> 利益も完うしたりと云ふ能はず、……	……苟此業未興。則俄國交際。與西伯利亞地方之利。亦未可謂完成也。……
8				……此の計畫成らざれば西比利亞鐵道の <b>國際的</b> 價格も <b>地方的</b> 利益も完うしたりと云ふ能はず、……	……苟此業未興。則俄國交際。與西伯利亞地方之利。亦未可謂完成也。……
9 東京日日新聞	1897(明治30)年	2月17日	大隈外相の演説	願くは外務大臣大隈伯爵閣下は其答辯に就き政府從來の慣例を■ <b>可及的</b> 速に答辯の勞を取り答辯するの時は……	該当なし
10				……且人文進歩し交通發達するに從て貨幣の <b>世界的</b> 性質たるの實益々明ならんとす	……及人文進歩。四方交通。日盛一日。貨幣之用。至普徧於環球。而其性質。亦將漸彰明也。
11				……夫れ貨幣制度は本來 <b>世界的</b> 性質を有するものなり	……何則。幣制之當出於畫一。固彼都人士所夙稱。其幣制同盟之興。
12 東京日日新聞	1897(明治30)年	2月23日	幣制改革論 (上)	……且此の如き <b>人爲</b> 的作用の外に於て金銀の移動を攻するの道あり……	該当なし
13				……今日の急務は杜撰の設定を止め先づ適當の方法を設けて委しく金銀の <b>人爲的</b> 及び <b>自然的</b> の現象を研究し事物の真相と内外の形成とに據り適確動かすべからざるの比率を定むるにあり……	……今日之急。在詆斥杜撰架空之論。而施設合宜之方。夫金銀比價之變動。本有出於自然者。又有由於人爲者。則宜研究二者之顯象。考内外之情勢。以定其比例率矣。……
14				……諸國の勞働者が既に <b>國際的</b> 運動を爲さんと計畫しつゝある事を相共に調査せん事は諸國政府の齊く望む所なるは朕の確信する所なり	……列國力擬稽查勞工等。欲爲聯合萬國訂同盟之情形。朕所確信也。
15				…… <b>國際的</b> 一致の協議を獨逸政府と相俱にするの意なきやを以てせんと欲す。	……以與諸國一律。其憂念勞工也如此。
16				……其他の <b>社會政策的</b> 立法にして能く其目的を達せしもの果して幾何かある……	該当なし
17				……然れども既に世界各國と和親通商の道を開き <b>世界的</b> 市場に立て <b>世界的</b> 商業を爲すに至れる今日に於いては……	……與地球各國。互市貿易。已非復前日可比。然則當今之時。……
18				……然れども既に世界各國と和親通商の道を開き <b>世界的</b> 市場に立て <b>世界的</b> 商業を爲すに至れる今日に於いては……	……與地球各國。互市貿易。已非復前日可比。然則當今之時。……
19				……希臘政府は決してクリートの <b>革命的</b> 現状を一掃する能はざるを倡ず	……竊恐未能一掃革雷得之妖氛也。
20				……島内無政府の現状は之を除去するを得ずして横暴なる狂漢は其■と火とを携へて <b>破壞的</b> 行動を繼續し爲に或る住民は遂に殲滅せらるゝに至らん	……吾恐其民狂躁。手執炮火以行殘虐之事。又復如今日耳。
21 東京日日新聞	1897(明治30)年	5月6日	希臘政府の回答	……故に希臘政府にして沈黙を是れ事とし敢て諸大強國の施行せんとする自治制度に反對するをなさず <b>有機的</b> 機關を形成せる他の州都が嘗て自由を得て希臘に併せし時に	……依附諸大國所爲。則恐敵國貽外人以口實也。諸大國猶不省悟敵國之言。欲以施自治制度。功績未舉。
22				……又國家財政の掌經を粉亂し <b>社會的</b> 活動を妨害せんとす……	該当なし
23 東京日日新聞	1897(明治30)年	6月13日	露獨澳の新三國同盟	……暗に之に <b>政治的</b> 意味の存せることを舉示せんと試み……	……如出一轍。故德皇之行。固胚胎於此也。……

24	東京日日新聞	1897(明治30)年	7月7日	布哇合併に関する米國大統領の教書	……米布交際の親密なるは <u>歴史的に</u> 来りたるものにして……	……美布之親交。非始於今日。其所由来遠矣。……
25	東京日日新聞	1897(明治30)年	7月22日	外交家の機敏強硬	……我軍勝を得て今日 <u>屈辱的の</u> 講和を結ぶを要せず……	……謂勝敗本兵家之常。今日之挫被俄屈辱極矣。……
26	東京日日新聞	1897(明治30)年	7月25日	經濟事情	……それから第二には <u>比較的</u> に賃金が減却し尚ほ減却しつゝ、あると云ふのは……	該当なし
27					……國庫に這入ったものは再び民間に出てても多くは <u>不生産的に消費</u> せられて社會の中流以下の手に落とると云有様であるそう云有様だからして……	該当なし
28	東京日日新聞	1897(明治30)年	7月16日、18日	朝鮮の金(西和田氏の談話)(西和田氏の談話承前)	……然れども從來邦人の朝鮮の事を説くもの單に政治の一局面に偏し <u>學術的の眼</u> 光を以て廣く諸般の事物を觀察するもの……	該当なし
29					……至りにあらずや日本人が始めて <u>文明的施設</u> を應用せし朝鮮の鑛山は……	該当なし
30	読売新聞 朝刊	1898(明治31)年	3月10日	露國旅順口借入に就ての觀察	……之とて以上三國の黙認を得ハ強ち <u>絶對的に抗議</u> をもなさざるべしとの考えより扱てハ公然斯る要求をなして憚らざるに至りたるものなるべし……	……惟日本爲可關心耳。雖然。苟爲英法德三國所許。則日本亦必不抗我。……
31	読売新聞 朝刊	1898(明治31)年	3月8日	臺政刷新の綱領	……臺政の <u>根本的革新</u> の大方針に就いてハ屢々記する處ありしが今や信任兒玉總督及後藤民生局長等の間に妥協熟議を了したる内閣既定方針の綱領とも云ふべきものを聞くに左の如し	……思日本國家治臺政策。不當如此乎。
32					……一官吏の能才と撰擇し <u>可及的減員</u> の方針を採り大に冗員を淘汰する事	……二曰大減冗員。舉賢才而罷不能。三曰大變邑里行政之法。須參酌舊制。以收攬民心爲第一義。
33					……一下級行政機關の組織を改正すること 即ち舊領時代に於ける <u>自治的の</u> 制度に倣ふの利なるを認めたるを以て適員折衷的組織を成し機務の敏捷を計ると同時に民人を收攬する一策となすと云ふにあり……	該当なし
34	……一下級行政機關の組織を改正すること 即ち舊領時代に於ける自治的の制度に倣ふの利なるを認めたるを以て適員折衷的組織を成し機務の敏捷を計ると同時に民人を收攬する一策となすと云ふにあり……	該当なし				
35	読売新聞 朝刊	1898(明治31)年	3月22日	韓廷及韓民の激昂鏡路街上の大集會	露國政府が今回の照會をなしたる其真意果して如何一般の識者間にハ之を以て露或ハ十分の決心なく單に一時 <u>示威的の運動</u> に止まるが如しと認められつゝ、あれど……	俄國駐紮韓京公使。稟命於其國國家。送公文於高麗國國家。且親謁高皇。質問以事。高皇不爲威所脅。對辭得體。

- (19) 故嚴氏之學風非哲學的而甯科學的也
  - (20) 我中國之思想同為入世間的非如印度之出世間的
  - (21) 況中國之民固實際的而非理論的
  - (22) 抑我國人之特質實際的也通俗的也西洋人之特質思辨的也科學的也
  - (23) 則以具體的知識為滿足
- (下線部筆者)

王(1905)では“科學家之本分”“由日本之介紹”“未有顯著之影響”のように現代中国語で“的”と表される連体修飾の助詞は全て“之”を以て表しているが、文中に何度か不自然に“的”が使用されているのである。この“的”はどれも抽象語に付着し、形容詞的意味を表している。このような例、そして「論新學語之輸入」において「使える日本の新語は進んで使うべきである」と述べていることから見て、意識的な使用かどうかは定かではないが、これらの“的”は、日本の形容詞化の接尾辞「的」の影響

響を受けたものである可能性は大いにある<sup>33)</sup>。しかしながら、これらは限られた例でしかなく、1900年前後の中国においてこのような近代的な表現はまださほど問題になっていなかったようだ。しかしその後、西欧諸語や日本語の翻訳が大量になされるにつれて、品詞変更機能を持つ接尾辞や“的”字の用法は重大な問題の1つとなっていき、1919年以降起こった言文一致運動で、大いに議論されることとなるのである。次章では、近代以降白話運動の中で“的”がどのように議論されたか述べる。

### 三 日本語「的」を巡る論争

#### 3.1. 『晨报』における“的”論争

“的”字に関する論争は多く行われてきたが、その中でも最も初期のものに、1919年から1920年にかけて『晨报』紙上で行われたものがある。『晨报』上での論争は、管見によると1919（民国8）年11月12日、胡適が『晨报』紙上の通説欄に「“的”字的用法」というタイトルで“的”に関する疑問を提示したことにより起こる。この文章は、止水氏が「“的”字は「術語（専門用語）<sup>34)</sup>」のみに用い、「底”字は「助詞<sup>35)</sup>」に用いる。」「日本の「的」字は、時には形容詞のように用い（「理想的公園」）、時には副詞のように用いる（「利他的運動」）。だからこれらは「術語用」という類に分類し、本家の面目を立ててそのまま「的」を用いることにする。<sup>36)</sup>とした“的”論に問題を提起したものであり、胡適は“的”の当時行われていた用法を8つに分けて分類分析した上で、「“的”字は分類する必要がないが、文章が分かりにくいときは“美國之民治的發展”のように<sup>37)</sup>，“之”を使用してもいい。」「もし（止水のいうように）“底”字を使用したいならば細かな用法を決めるべきである。」と述べた。これがきっかけで『晨报』上で様々な

33) また、王（1905）では、“的”の他、“政治上之意見”“科學上之引證”“思想上之事”“知識上之要求”のように連体修飾語となるときは“上”を抽象語句に付けて場所化することで語句の概念を形容詞的に運用している。

34) ここで止水が言う「術語」とは“理想”“科学”のように日本から輸入された学術にかかわる言葉を指すようだ。止水は「日本の「的」字は、時には形容詞のように用い（「理想的公園」）、時には副詞のように用いる（「利他的運動」）。だからこれらは「術語用」という類に分類し、本家の面目に免じてそのまま「的」を用いることにする。」としたが、この「術語」という分類は胡適らによって品詞分類ではなく、「助詞」という品詞分類と共に分類範疇とするのはおかしいと指摘される。

35) 「再論『的』字」（『晨报』1919年11月25日）7面において、胡適は「術語」と「助詞」の分類について問題を提起した際、「『助詞』は中国が以前文法上の専門用語がなかった時に用いた曖昧な名詞であり現在存在する価値がない」としているが、『晨报』上に記載された他の“的”論にも“助詞”という言葉は使われており、文脈から今日と同じ「助詞」の意味を含む範疇であると考えられるが、止水の原文未見のため、ここでの範疇が分からない。「討論『的』字的用法」（『晨报』1919年11月29日）7頁で孟真は、止水のいう「助詞」とは「位詞（prepositional phrase, 前置詞句）」のことでありとしている。これは当時“的”が「特別「介詞（preposition, 前置詞）」と理解されていたことを考えると、妥当である。「介詞」に関しては注39参照。

36) 原文未見。『晨报』内で胡適らが引用した文章による。

37) 止水が提示した例か。“美國的民治的發展”は「アメリカ的な民権の發展」なのか「アメリカの民権の発達」なのか分かりにくいという問題と思われる。なおこの例はよく引用され、陳望道「“的”字底新用法」（『陳望道語文論集』上海教育出版社、1980年）19-21頁では夏巧尊「“的”字的用法」（『浙江省立第一師範學校校友會十日刊』第6号）において提起された問題と記されている。

意見が交換されることとなる。これら“的”論は大体が、

- “的”の字義と来歴
- 現在使用されている“的”の用法
- 日本語の「的」について
- “的”を書き分けるか否か、書き分けるとすればどのように書き分けるか

の4点から議論されている。中でも中心となるのは「“的”を書き分けるか否か」、書き分けるとすれば「形容詞の接尾辞「的」と、中国語の名詞を修飾する助詞“的”をどう書き分けるか」についてであり、「書き分けるか否か」については、以下のような意見に分かれた<sup>38)</sup>。

- A) 書き分けの必要なし（必要なときのみ対処する）
- B) 2つに書き分ける
- C) 3つに書き分ける

以下、それぞれの知識人が最終的に行き着いた“的”書き分けに関する意見をまとめた。

A) 書き分けの必要なし（必要なときのみ対処する）

胡適：

- ① 全てに“的”を用いる。（だが例えば“平民的衣食住”のように「平民の衣食住」なのか「平民のような衣食住」なのか分かりにくい時は、前者のような名詞の後ろの“的”が「所有」の語尾を表す例には、“的”の代わりに“之”を用いてもいい。）

邵西：

- ① 全てに“的”を用いる。（“平民的生活”のように「平民の生活」なのか「平民のような生活」なのか分かりにくい時があったとしても、前者は“世界平民的生活”のように必ず文脈があるはずであるし、後者も文脈で推し量れる。もし後者が文脈で分からないならば“平民式的生活”と記せばいい。）

B) 2つに書き分ける

止水：

- ① “底”……「助詞」に用いる。
- ② “的”……「術語」に用いる。

銭玄同：

- ① “底”……「介詞（現在で言う助詞）<sup>39)</sup>」に用いる。

38) 中国語文雑誌社編『五四以来漢語書面語的変遷和発展』（商務印書館、1959年）143-144頁によれば「細かな書き分けに関しては、「散動」と「散動」が作る形容詞、文の後ろの“的”は全て“+的”とする」という書き分けもあったというが、「当初から社会で認められなかった」らしく、例文は未見。

39) ここでの「介詞」は、現在の「助詞」の範疇にはいる。止水の「助詞」と同じものを指すと考えられるが、原文での表記が異なるためこの様に記した。黎錦熙『新著國語文法』（商務印書館、1924年）197-215頁では介詞を“時地介詞”“原因介詞”“方法介詞”“領攝介詞”に分類し、“領攝介詞”は“特別介詞”とも表し、“領攝介詞”以外の介詞は全

② “的”…… 形容詞の語尾と副詞の語尾，代名詞の所有格に用いる。

孟真：

① “底”…… 形容詞句と形容詞節に用いる。

② “的”…… 形容詞の語尾と副詞の語尾に用いる。

沈兼士：

“底”“的”“地”の中から2字を決めて，用法を定めるべきである。

### C) 3つに書き分ける

周建侯：

① “底”…… 「介詞」に用い，文言で記すときは“之”を用いる。上声に読む。

② “的”…… 日本語の「的」に用い，入声に読む。

③ “地”…… 副詞に用いる。去声に読む。

陳独秀：

① “底”…… 「介詞」に用いる。

② “的”…… 形容詞の語尾に用いる（「之」「者」「只」と日本語の名詞性形容詞）。

③ “地”…… 副詞の語尾に用いる。

抱影：

① “底”…… 「介詞」に用いる。

② “的”…… 形容詞の語尾に用いる。

③ “地”…… 副詞に用いる。

これに加えて，将来中国語がピンイン表記されるようになれば，形容詞，副詞，代名詞の語尾を作る“的”（≡「的（テキ）」）は“kexuede yanjiu（科学テキ研究）”，「介詞」を作る“的”は“kexue de yanjiu（科学ノ研究）”と区別をすればよいと付した知識人もいた<sup>40)</sup>。

これらの議論は1919年11月から12月にかけて紙面上で行われ，その議論は国語統一籌備委員会常会で取り上げられたことから“的”に関する問題が当時如何に重要なこととされていたかが分かる<sup>41)</sup>。陳望道（1920）によるとこれらは結局以下の通り分化すると決着がつき<sup>42)</sup>，『新青年』7巻2号から実践使

---

て結びつける語の前に置かれるため“前置的介詞（前置詞）”と呼ばれるが「領攝介詞」は結びつける語の後ろに置かれることから「後置介詞」ともいう。これは中国語に特有のものなので特別開始ともいう。英文のofも“領攝介詞”だが，前置なのでほかの介詞（前置詞）と同じである」としている。また，台湾では現在でも助詞“的”は所有格を表す際は“介詞”として分類される（周何主編『國語活用辭典』五南圖書出版，2004（民国93）年，1406-1407頁）。以後，本文中で「介詞」とした場合は，当時の分類を指すこととする。

40) 錢玄同「我先再對於『的』字用法底意見」（『晨報』1919年12月2日）7-8面（ピンイン表記は筆者が現在通用のものに改めた）。

41) 邵西「的」字問題的討論」（『晨報』1919年12月3日）5面。

42) 陳望道「“的”字底分化-化作“的”，“底”，“地”」（『陳望道語文論』上海教育出版社1980年（初出1920年））25-27頁。

用していくことになった<sup>43)</sup>。

“的”	代名詞	(A) “者” の字に代える (EX. “殺人的”)
		(B) “所” の字に代える (EX. “天殺的”)
	形容詞	(A) 本来的 (EX. “紅的花”)
		(B) 名詞的 (EX. “理想的”)
(C) 動詞的 (EX. “吃的東西”)		
“地”	副詞語尾	EX. “孤孤淒淒地坐在門前”
“底”	「介詞」	(A) 名詞の後 (EX. “民國日報底覺悟欄”)

ここから見るに、1920年の段階では、近代日本発生の「的」について、最終的に接尾辞「的」としての用途を理解、受容しつつ、他の中国語既存の名詞を修飾する“的”と同じ表記にすることで一段落したのだと考えられる。

### 3.2. 日本語接尾辞「的」に関する理解

そもそも以上のような「“的”を書き分けるか否か、どのように書き分けるか」という議論が持ち上がったのは、日本語から大量に接尾辞「的」の用法が輸入されたことで、中国語既存の助詞的用法“的”と混同され、日本語「的」を巡って理解の混乱が起こったからである。

我想為甚麼想起把『的』『底』兩字、在白話文裏『分職』呢？ 就因為『日本文輸入』我們已經用得熟而又熟底一個『的』字、這個『的』字用法在日本是因為翻譯西文底需要、才創出來底、不但在中國『大可補文言之缺點……文言所不及』就在中國白話裏和其他一切習用底『的』字、意味迥然不同、例如『自然的』『理想的』『利己的』『利他的』『紳士的』『平民的』……

(私がなぜ“的”“底”の2つの字を白話の中で「分業」すべきと考えたかと言えば、それは「日本語の輸入」によって“的”という字について、よく使用し、またよく知るところとなったからである。この“的”字の用法は、日本で西欧語を翻訳する必要から生み出されたもので、中国で「文言の欠点、文言の及ばないところを補う」、つまり中国白話の中のその他常用される“的”字とは全く異なる意味である。例えば「自然的」「理想的」「利己的」「利他的」「紳士的」「平民的」……のように。)(止水「答『適之』君『的』字」(『晨報』1919年11月13日)7面)

(日本語訳・下線部筆者)

陳独秀は、これら多くの日本語由来の「的」の用法を、中国語の助詞“的”の用法と混同していたと考えられる文章を記している。

……例如「科學的研究」、這意思是說研究科學、還是說■科學的方法來研究別的呢？又如「病的狀態」、這意思是說病狀經過底狀態、還是拿病■形容別的東西底狀態呢？(中略)……「科學的研究」、「病的狀態」、所以會發生誤會底緣故、就是一個「的」字可以作「介詞」和「形容詞底語尾」兩樣解

43) 陳望道「“的”字底新用法」(『陳望道語文論集』上海教育出版社、1980年(初出1920年))19-21頁。

法、意思便大不相同。又像「哭的声音」這句話、也有兩樣意思、「哭的声音」、「哭的」兩字是一個形容聲音底形容詞、說一種聲音和哭一般；若『哭「底」聲音』乃是「哭聲」底意思。這樣分別開來、才不致發生誤會。

（例えば“科学的研究”は、科学を研究することなのか、それとも科学の方法で別のものを研究することなのか。また、“病的状態”というのは、症状が経過する状態なのか、あるいは症状で別のものの状態を形容しているのか。（中略）……“科学的研究”“病的状態”という用法が誤解を生み出す原因は、“的”字が「介詞」と「形容詞の語尾」の2つに解釈ができるからであり、意味も大いに異なるからである。“哭的声音”にしてみても2つの意味がある。“哭的声音”の“哭的”という2つの字は声を形容する形容詞であり、ある声が泣いているようであるということを表す。もし“哭底声音”ならば、それは「泣き声（哭声）」の意味である。この様に分類すれば誤解は発生しないであろう。）  
（陳独秀「論的字的用法」（『晨報』1919年11月22日）7面）

（日本語訳・下線部筆者）

無論、この「的」を中国語が元々持っている用法と考えた知識人もいた。

……簡單一句話、這種的字的並沒有什麼特別性、也不是日本化底、是中國白話本來有的。

（端的に言うと、この種の「的」字は決して特別なものでも、日本的なものでもなく、中国白話が本来持つものである。）

（胡適「再論『的』字」（『晨報』1919年11月25日）7面）

（日本語訳・下線部筆者）

……所以這種ノ字和的字的、都是由中文轉成日文的、並不是日本輸入西洋文法以後才有的。

（つまりこれらの「ノ」や「的」字は、みな中国語が日本語になったものであり、決して日本が西洋文法を受容して以降現れたものではない。<sup>44)</sup>）

（抱影「的字的用法底問題」（『晨報』1919年11月27日）7面）

（日本語訳・下線部筆者）

だが、どちらにしてもこの日本語の接尾辞「的」が、中国の近代における言文一致運動と、近代語を受容していく過程で関わっていたことは間違いない。更に“的”の用法が論議される中で、「文章を更に西欧語に近づけた<sup>45)</sup>」日本語の「文法」を西欧語とは関係のないところで中国語に取り入れることを検討した知識人もいた。

在日本人譯西文、其於前置詞（介詞）『of』、則譯為『ノ』、重譯漢文、則為『之』、白話作『的』、

44) 抱影は日本語の「ノ」と「的」の差を俗語と文語の差であると考えていたようである。

45) 孟真「討論的字的用法」（『晨報』1919年11月29日）7面。

非日本譯文中之『的』字也、日本文中自有的字如『理想的』『自然的』『利己的』『利他的』……等皆以理想、自然、利己、利他、……等為準的、此為形容字而非介字也、與英文Like字相似、如Gentleman-like譯為『紳士的』、此譯可解作以『紳士』為準的、如曰『The man is gentleman like』、譯以漢文則為『其人為紳士的』此『的』字自與『之』字轉來之『的』『底』字異、日本文中、往往有『紳士的ノ人(The gentleman-like man)』若『ノ』字譯作『之』則為『紳士的之人』、似乎不詞、然意義自屬明瞭、謂『似紳士之人』也、譯作『似……』字、又不足以該全體、如利己的、『自當的』理想的……不可曰『似利己』『似自然』『似理想』……也、凡西文中之品質形容字、日文多譯作『……的』如『The ideal park』譯作『理想的ノ公園』、此種『的』字皆為準的之『ノ』字方為『之』字、如白話以『之』字為『的』、前諸例均為『紳士的的人』、(中略)……『理想的的公園』殊多不便、(中略)……如『社會的底科學』『理想的底公園』……、字義皆有分別、問答亦均無滯礙、最便利者莫過於是矣、(日本人は西歐語を訳する際、西歐語の前置詞“of”を「ノ」と訳した。これを更に漢語に訳すれば「之」となり、白話では「的」とする。これは日本で訳された文中の「的」字とは異なる。日本語中には「理想的」「自然的」「利己的」「利他的」のような語があり、これは皆「理想」「自然」「利己」「利他」などを基準にしたもので、形容詞であり「介詞」ではない。これは英語の“Like”と似ており、“Gentleman-like”を「紳士的」と訳するように、この訳は「紳士」を基準にしていると理解できる。例えば“The man is gentleman like”は、中国語で訳せば“其人為紳士的”となり、ここでの“的”は“之”“底”から転化した字ではない。日本語ではよく「紳士的ノ人(The gentleman-like man)」というような表現があるが、もし「ノ」を“之”に訳し、“紳士的之人”にすると語でないようであるが、意味は明確になる。“似紳士之人”のように“似……”とすると、「利己的」「自當的」「理想的」が“似利己”“似自然”“似理想”とすることができないことから分かるように、全体を表すことができない。凡そ西歐語の中の形容詞は、日本語では多く「……的」と訳される。“The ideal park”が「理想的ノ公園」と訳されるように。これらの「ノ」字は“之”と表すことができ、“之”は白話では“的”である。そうすると、前述した例は“紳士的的人”“理想的的人”となり、非常に不便である。(中略)……“社会的底科学”“理想的底公園”とすれば、字義も書き分けしており、最も便利である。)

(周建侯「『的』字」(『晨報』1919年11月13日)7面)

(日本語訳・下線部筆者)

周建侯のこのような意見は接尾辞「的」と共に日本語の格助詞までも中国語で置き換えてしまおうというものであり、胡適によって“這是日本笨伯『屋上架屋』的笨法子、我們何必學他!”“都是借日本文來替中國改造文法。這個並不是我們研究文法的人的事業。”<sup>46)</sup>と指摘されたが、完全に行われなかった方法というわけでもない。

46) 胡適「再論『的』字」(『晨報』1919年11月25日)7面。



### 3.3. 日本語的文法の実践

1930年に魯迅は『現代電影與有産階級』<sup>47)</sup>として、岩崎昶が1929年に発表した『宣傳、煽動手段としての映畫』<sup>48)</sup>を翻訳したが、この訳文中に、周建侯（1919）で提示された「的」の表現方法と類似の用法が使用されている。

岩崎（1929）中での「的」は全125件、うち連体修飾100件、連用修飾18件、述語を作るもの7件である。これらの「的」を魯迅は以下のように訳出した。括弧内は日本語原文及び翻訳語の中国語文で「的」がどのような文法成分に当たるかを記述したものである。

- ① “底”……………63件（連体60，連用1，述語2 / 定語60，状語1，謂語2）
- ② “底的”……………31件（連体28，連用0，述語3 / 定語28，状語0，謂語3）
- ③ “底地”……………8件（連体0，連用8，述語0 / 定語0，状語8，謂語0）
- ④ 書き換え……………13件（連体4，連用8，述語1 / 定語3，状語7，謂語3）
- ⑤ “的”……………5件（連体5，連用0，述語0 / 定語4，状語0，謂語1）
- ⑥ 「的」を取った単語 ……4件（連体2，連用1，述語1 / 定語2，状語0，謂語2）
- ⑦ 該当箇所の翻訳無……………1件（連体1，連用0，述語0）

以下、紙面の都合上数例のみの例文を記載する。番号①～⑦は、上記分類①～⑦を指す。

例：

①

- (24) ブルジョワ的社會の勃興，宗教改革，等の重大な歴史的契機がそれによつて結果せしめられた。  
(有産者底社会的勃兴，宗教改革，那些重大的历史底契机，由此得了结果了。)
- (25) 現在，思想の運搬に於て，イデオロギー決定の上に於て，映畫の課せられてゐる任務は更に積極的であり，更に意識的である。(现在，在思想的运输上，在观念形态的决定上，电影所负的任务，就更加积极底，更加意识底了。)

②

- (26) そして遂に，フィルムの七卷目に至つて，ブルジョワは蜂起し，極めて映畫的なクライマックスと，壯大なモブ・シーンをそこに展開する，といふのがその典型的な段取りである。(到影片的第七卷，而有产阶级终于蜂起，将电影底的极顶 (Climax) 和壮大的群集 (mob scene)，在这里大行展开，这是那典型底的结构。)
- (27) 一見した處，現在の映畫，殊に映畫劇は寫實主義的である。(粗粗一看，则现在的电影，尤其是

47) 魯迅「現在電影與有産階級」(『魯迅全集』4卷(『二心集』収録(初出『萌芽月刊』第1卷，第3期)1930年)，人民文学出版社，1981年)389-413頁。

48) 岩崎昶「宣傳、煽動手段としての映畫」(『新興藝術』創刊号-第2号，1929年10-11月，藝文書院)

电影剧，乃是写实主义底的。)

③

(17) そこに、世界大戦といふ重大な歴史的事件を、國民的叙事詩の姿に於て、藝術的に再現する欲望が生じて來るのは自然である。(于是发生一种欲望，要符世界大战这一个重大的历史底事件，在国民底叙事詩的形态上，艺术底地再现出来，正是自然的事。)

(18) ルナチャルスキーが、嘗てソヴェート映畫に就いて説明した「拙劣なアジテーションは却つてその反對の結果を招く」といふ原則が、こゝではブルジョワ的に應用されることになつた。(卢那卡尔斯基关于苏维埃电影，曾经说明过“拙劣的煽动，却招致反对的结果”这原则，在这里，却被有产者底地应用了。)

④

(19) 映畫が支配してゐるこの龐大な觀衆，また映畫形式の直接性，国際性，——映畫は，量的にも，質的にも，大衆的宣傳・煽動のための絶好の容器であることが立證されて來る。(电影所支配的这庞大的观众，以及电影形式的直接性，国际性，——就证明着电影在分量上，在实质上，都是用于大众底宣传，煽动的绝好的容器。)

⑤

(20) 何故ならば、この種の映畫は、その外形上の差違こそあれ、究局に於ては帝國主義戦争への意識的準備であり、鼓舞である點で、そのショーヴィニズムに於て、その好戦性に於て、戦争映畫と本質的に聯關してゐるものなのであるから。(为什么呢？因为这种电影，虽有外形上的差违，但终极之点，是在向帝国主义战争的意识的准备，鼓舞，在那君权主义上，在那好战性上，和战争影片是本质底地相关联的。)

⑥

(21) 一九二七年の春、ドイツ國權黨の領袖の一人であり、アウグスト・シヤール書房の事實上の所有者であるフーゲンベルグは、ドイツ随一の大會社ウーファ社の財政的危機に乗じて、その株の過半を買ひ占め、ウーファ社總支配人の椅子に坐つた。(一九二七年春、德意志国权党领袖之一，奥古斯特・霞尔书店的事实上的所有者福干培克，乘德国大公司之一乌发公司的财政危机，买进了那股票的过半，坐了乌发公司总经理的交椅了。)

⑦ (省略)

(下線部筆者)

⑤と⑥は法則にそぐわないので、今後検討が必要ではあるが、魯迅は殆んど直訳に近い形で原文に忠実に翻訳しており、以下のような対応が見られる。

- 接尾辞「的」→“底”
- 連体修飾の助詞「ノ」や「ナ」→“的”
- 連用修飾の助詞「ニ」→“地”（この法則は、②の例のように、述語であっても忠実に適応される。）

この分類は周建侯（1919）の分類とはやや異なるものの、日本語の格助詞までもが直接中国語で写されているという点では同じ表記方法といえる。

### 3.4. 形容詞化接尾辞の不成立

現代中国語で“的”は、その書き分けについて「すべての修飾・被修飾構造が文の中で占める位置によって決められる」というのが共通認識であり<sup>49)</sup>、これら自体が“性”や“化”のように接尾辞として考えられることは一般にない。1910～1920年代の中国において活発に討論された“的”字、そして「形容詞の接尾辞「的」と中国語の名詞を修飾する助詞“的”をどう書き分けるか」ということに関する議論の中で、一旦は形容詞化の接尾辞として捉えられていた“的”は、“化”“性”のような接尾辞とは異なり、徐々に名詞修飾の助詞“的”用法と「同化」していった。そして、“平民的生活”“理想的公园”のような例中の“的”は、「的」として用いる場合は“平民般的生活”“合乎理想的公园”，「ノ」として用いる場合は“平民的生活”“理想的公园”のように、接尾辞以外の方法を用いて表されるようになった。また、動詞を修飾する際には、抽象名詞は多く兼類語化し“科学地论证”“历史地考察”<sup>50)</sup>のように、“地”で関係を表される。

“上”“性”“化”と異なり、形容詞化の接尾辞として“的”が現代に存在しない理由は3点考えられる。第1に漢字が表意文字であること。現代に存在する接辞は“的”と異なり、“上”“性”“化”のようにその語自体が比較的強く意味を保っている。また、“女性”“变化”などのような2字語として以前から存在していたため、その使用に違和感がなかった。逆を言えば、近代に接尾辞として用いようとした“的”は、“的”や“底”という漢字が表す意味を含まなかったため、廃れていったと考えられる。接辞が単に品詞を変化させるだけの「標示」として用いる方法は、多くの音訳語と同じく、中国語には定着しにくかったのである。

第2の理由は、発音上の問題である。李振中（2008）<sup>51)</sup>は、「“底”は実践的使用の中で否定され、1950年代にはほとんど姿を消した」としている。“底”の衰えについて、先行研究は多く「翻訳の中で使用された」が「使用が乱れたので、いっそのこと使用しない方がいいと反対にあった<sup>52)</sup>」としている。当初は“的”について、形容詞変化させる接尾辞は“的”，名詞を修飾する助詞は“底”などと表記上の区別をしていたのかもしれないが、発音上は差異がなく、また一般の人にはそのような文法上の知識もないため、大衆語論争を経て、区別がなくなっていったのであろう。

そして最後に、接尾辞として“的”が現代に存在しない第3の理由は、中国語自体の性質の問題であ

49) 李振中「現代漢語結構助詞“的”的分合問題研究」（『山西師大報』第35巻第5期，2008年）124頁。

50) 呂叔湘ほか『中国語文法用例辞典——《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』東方書店，2003年）90頁。

51) 李振中（2008）123-127頁。

52) 曾毅夫編著・黎錦熙校訂『“的”字底用法與分化』（河北人民出版社，1957年）7頁。

る。1920年代前後に行われた論争の中で何度か問題に出された“理想”“科学”などの抽象名詞は、現代では名詞と形容詞の兼類を取っていることが多いとは前にも述べた。それは名詞の抽象度が高ければ高いほど、或いは名詞の持つ役割性、イメージ性が強ければ強いほど名詞の形容性は強くなるからなのであるが、更に中国語は語順が品詞決定に重大な影響を及ぼす性質を持つ言語であるため、このような抽象名詞を形容詞の位置に置くことで、形容詞として自然認識させることが可能になるのである。中国語において、当初は“理想的”“理想底”などのように意味分けをしていたが、“理想”という単語の意味が広く知れ渡るにつれ、話者が“理想”に対して共通のイメージを持つようになった。そして“理想”の形容成分が話者の意識の中で認識されることとなり、形容詞としての意味も定着していったのであろう。それに伴い、“理想的”の構造が、「名詞＋形容詞化接尾辞」から「形容詞＋構造助詞」と認識されるようになり、“底”“的”の区別が不要になったのである。

しかしこの変遷を前提に置くと、現在でも使用される抽象名詞を使用した“理想的工作”のような構造が「形容詞＋助詞＋名詞」として理解されるのは、“的”が形容詞化接尾辞として理解されなくなったからだとも言え、この構造は「形容詞＋助詞＋名詞」の成分と共に、「名詞＋形容詞化接尾辞＋名詞」の成分を保ち続けているとするのは間違いではない。その意味では、現在でも“的”に一部形容詞化接尾辞の機能が残っているといえる。

## おわりに

以上の事から、近代中国における日本語の形容詞化接尾辞「的」の中国における受容と変遷は以下のようによまとめられる。

- 日本人が西欧語翻訳の中で作り出した「的」は多くの近代語と共に中国に渡っていた。
- 当時の知識人は日本の「的」は名詞を形容詞化していると理解していた。
- 白話運動の中で、形容詞化の接尾辞を如何に表すか議論された。
- 一時期、「的」は形容詞化の接尾辞として中国語に取り入れられた。
- 「的」と助詞“的”の混同、そして中国語の文法構造上の理由で、形容詞化の接尾辞としての“的”は規範上姿を消した。しかし、いくらかの近代抽象名詞に付着する“的”は形容詞化接尾辞機能を持つと考えても間違いではない。

『晨报』上での意見からは、当時日本語に見える形容詞化接尾辞「的」について理解が定まらず、名詞を修飾する“的”と混同しており、中国語で“的”を形容詞化の接尾辞として用いていくことは難しいと予測できる。

我自從見了獨秀君的文章之後、才恍然知道那日本派的「……的」、實在和「大的」「小的」「白的」「黑的」沒有什麼不同、並不是一種特別的句法、斷斷乎無須另外用一個字來做語尾。

(私は陳独秀氏の記事をよんで、ようやく日本の「……的」は、実のところ“大的”“小的”“白的”“黑的”と何の違いもなく、決して特別な文法ではなく、全く違う字を作って語尾にあてる必要はないと気付いた。)

（錢玄同「我現在對於『的』字用法底意見」（『晨報』1919年12月2日）7-8面）

（日本語訳・下線部筆者）

だが、言語の品詞を接尾辞という方法で変化させることができれば、効率がいい上、表現力も格段に上がるはずである。現に“化”“性”などの品詞変更機能を持つ接尾辞は現代中国語で多用されるようになっている。当時の知識人が“的”を形容詞化の接尾辞だとして使用しようとしたのも、名詞から形容詞への品詞変更機能を持つ接尾辞の有用性に気づいていたからであろう。現在、中国語は名詞と形容詞の兼類語や、或いは“有……性質”などのように形容するところを明確にすることで対処しているが、それは果たして名詞、形容詞間の変換が可能になったといえるのであろうか。むしろ言語に優劣は存在しない。しかしながら、近年“很女人”のように本来「形容詞」として取られない名詞が程度副詞の修飾を受けて形容詞化する現象が問題となったように、中国語は現在も名詞から形容詞へと変換させるための新たな表現方法を模索し続けているのではないだろうか。

